

## 刊行にあたって

巻頭にあたり、本報告書の編集作業中、3月11日午後2時46分に発生したマグニチュード9の巨大地震、それにより発生した大津波で犠牲になった多くの方々のご冥福を祈り、今もなお不自由な生活を送る被災者の人々に衷心よりお見舞いを申し上げます。とともに、東北大震災の地震・津波被害に起因するとはいえ福島第一原子力発電所原子炉の崩壊による放射能汚染により居住地からの退避生活を余儀なくされている皆様方の心身の安泰を心より祈りたいと思います。

また、人身の安否はもとよりですが、今回の大震災では、われわれの関係する文書・民具・考古遺物・建築物など多くの史資料も被災し、博物館・資料館など収蔵施設の倒壊・流失の被害も数多く報告されています。この千年に一度ともいわれる大震災に対し、研究者として何ができるのか、また今後何をなすべきかを考えていかなければなりません。今は五感のすべてを動員して、この震災を心身に記憶し、記録にとどめ後世に伝えることが何よりの役割と考えています。

さて、本報告は、2010年12月11日（土）・12日（日）の両日にわたって開催された公開討論会・国際シンポジウム、共通テーマ「“モノ”語り－民具・物質文化からみる人類文化－」の発表内容により構成されています。第一日目は、国際常民文化研究機構の8研究グループの中で、民具研究に関係する3グループによる「民具の文化資源化－“モノ”研究の新たな挑戦－」をテーマにした公開研究会の形をとって問題提起を行ない、第二日目には、それを受けてフランス・中国の研究者も交え「“モノ”と“ヒト”の人類文化史」と題した国際シンポジウムが開かれ、国際常民文化研究における民具、物質文化研究の意義と方向性を論議、展開するという構成がとられました。昨今、多くのシンポジウムが催されますが、形式や時間の制限から実質的討議や内容を深化するには至らないことを改善しようとのささやかな試みです。3つの研究班のリーダーには翌日のシンポジウム・セッションの司会・進行をしてもらい、両日とも発表に対する総括を行うなど内容が有機的に連携する工夫もしました。総合討論の時間も長めに取り、また、質疑応答、フロアからの意見も積極的に受け付けました。それらの意図が本報告書の内容に少しでも反映していることを願うものです。

その内容ですが、日本語の“もの”は物的存在「物」だけではなく、霊的存在「もの」も表します。すべての“もの”に霊性が宿るといわけです。今回の公開研究会・シンポジウムでは、この“もの”の両様の性格を合わせた「モノ」、物質文化と精神文化、可視的世界と不可視の世界をつなぐ「モノ」という視角から、人と「モノ」の関係に焦点を当て物質文化研究の新たな課題を探ることを意図しました。

第一点としては、いずれの社会でも大多数を占める庶民が日常的に用いる道具、「民具」名称の国際標準化、学術資料化の可能性を検討しました。この分野は、「民具マンスリー」をはじめ日本常民文化研究所の長年の研究蓄積、文部科学省21世紀COEプログラム、更にその後継組織・非文字資料研究センターで取り組んできたマルチ言語版生活絵引の翻訳の作業を踏まえ進めてきた成果を反映することになります。それぞれの地域の風土条件の中で人々が制作、使用してきた民具は強いローカル性を示し、学界でも長年待望されながら全国名称、ナショナルレベルの標準名、共通名称さえ設定されないまま今日に至っています。また、民具は、世界中で、多くを占める文献記録を残さなかった地域、階層の人々の生活文化を解明するのに、有形の物質文化であるだけに第一級の基本資料となります。それだけに、その共通の基準づくりとなる名称の問題は乗り越えなければならない第一関門となり、その解決の道が問われてきたわけです。

第二点としては、「モノ」に託され、表された人々の意識、技術について論じました。形象や形態の背後にある技と心、モノと身体の関係性、モノの変化に伴う生活の変化などを取り上げ、モノと人間のか

かわり合いから、新たな人類文化研究の課題、方法を論じられました。

今回の国際シンポジウムでは、民具の国際的な学術資料化、民具研究の有効性を検討することを志向しましたが、民具の命名1つとっても、それぞれの土地の住民の自然観や世界観が反映し、地域性、時代性、階層性などの属性が加わり、さらに近代化の中での位置づけも問われ、グローバルな共通名称の設定には様々な課題が立ちはだかることがわかりました。しかし、その関門は比較研究の基礎となるものであり、高くても乗り越えなければならないハードルであることを再認識しました。

公開討論会・国際シンポジウムの構成や進行次第については、当初のもくろみが十分に実行できず、消化されずに生煮え的のところも残った感もしました。しかし、物が溢れる現代社会の中で、日常卑近な物を「モノ」の視角から見直してみることにより、改めて、人間の生活文化の奥行きの高さが実感され、新たな語りが生まれる可能性が導き出される糸口にはなったと思います。みなさま方が本報告書の内容からさまざまな視角を得られ、積極的な「モノ」語りを展開されることを期待するものです。

2011年7月 吉日

国際常民文化研究機構運営委員長  
神奈川大学日本常民文化研究所長

佐野 賢治